京芸術大学を停年退官し名誉教授となる。

### ⑦ 黒田記念館起工式

昭和二年十月二十二日、本校敷地内に建設される黒田記念館の起工式が行われた。同日の『国民新聞』はその正面見取図を掲げ、次のように報じている。

故黒田子記念館
美術校内にけふ起工

去る大正十三年六月逝去したわが洋畫界の泰斗故黒田清輝子が臨終に際し子爵所有の不動産三分の一を美術事業に寄附する旨を遺言したのに基き遺言執行者樺山愛輔伯、久米桂一郎氏、打田辯護士等は不動産の換價處分を三井信託に委託し昨年末全部を處分する事が出來たので今春牧野〔伸顕〕伯を總裁に福原〔鎌二郎〕美術院長、正木〔直彦〕美術學校長、岡田三郎助、和田英作、藤島武二、岡田信一郎その他の諸氏を委員として種々研究した結果、黒田記念館を建設して故子爵の遺作を陳列し美術並に古典藝術の研究に資する事になつた

記念館建設の場所は、美術學校構内　工費は十數萬圓、總建坪三百六十餘坪の不燃質建築とすることになり岡田信一郎氏の手で先月初旬設計も完了したので愈々今二十二日午後二時半地鎮祭を執行の上竹中組の手で工事に著手する事になつた

此の工事完成の上は維持費十數萬圓と共に美術學校に寄附して美術研究に資する筈であると〔下略〕

この記事に記されているように、当初は黒田記念館を本校の所属とする案もあったが、帝国美術院附属に決定し、昭和五年に至り、ここに同院附属美術研究所が置かれた。なお、黒田記念館の建物は旧東京府美術館、本学陳列館（422頁参照）とともに岡田信一郎設計の美術館三部作と言われる。

### ⑧ 无型と工人社

昭和初期の工芸界の発展に大きな役割を果したグループに无型と工人社が挙げられるが、両方とも本校関係者が中心となった団体である。

无型は大正十五年六月、高村豊周らを中心に結成され、創立時のメンバーは高村豊周、杉田禾堂、山本安曇、豊田勝秋、西村敏彦、佐々木象堂、内藤春治（以上鋳金）、北原千鹿、村越道守（以上彫金）、鈴木素興、加藤居山、太田自適、佐藤陽雲、田口啓次郎、松田権六、山崎覚太郎、吉田源十郎（以上漆芸）、広川松五郎、渋江終吉（以上染織）、藤井達吉（雑工芸）、渡辺素舟（評論）の二十一名、本校卒業生は十二名、その内当時本校教官は五名あり、いずれも新進気鋭の作家である。その後、松田権六が退会、磯矢陽が同人となるなどがあった。昭和二年一月、高村の私費刊行で謄写刷りの『无

『无型』創刊号表紙

型』を発行、その創刊号冒頭で高村は「无型は無型、型ナシだ。型を持たぬ。すべて自由に、各人各様の姿態を持つ」（「无型の誕生」）と記した。同年三月に第一回展覧会を三越で開催、第三回展から公募して、安倍郁二、磯矢陽、今井千尋、鴨政雄らが入選した。その存在は全国の若手の工芸作家に深い影響を与えた。无型は昭和八年四月に解消、広川松五郎はその声明書に「我等无型を結成して茲に八年、作品の展示六回に及ぶ。終始一貫あたかも世紀末的工芸美術の酸敗期に処し、外に因襲の打破、内に様式の樹立をめがけて逐年能くその所信を結実して今に及べり。かくて頭初我等が意図せるもの今や漸く工芸の全野に遍からんとするに当り、静に第二次の啓蒙を約して茲に結成を解き无型を解消す。右声明す」と結んだ。

昭和二年十一月、工人社が結成された。同人は北原千鹿、大須賀喬、鴨政雄、川本吉蔵、田村泰二、富田稔、信田洋、古橋茂、深瀬嘉臣、村越道守、柳川槐人、山脇洋二の十二人で、北原を主宰者とし、この内本校卒業生は四名、在校生が五名であった。大須賀喬「工人社の初期について」（『デザイン』三〇号。昭和三十七年三月）によると、工人社は新しい時代意識の上にたって彫、鍛金界の革新を標榜して創立結成されたが、主義主張はなく、各人それぞれ自由な立場と考えで作りたいものを作り作品発表をしようという主旨のグループだった。今までのような制作態度や先人の跡を追うような作品であってはならぬという気持だけは共通のもので、「何の野心もなく見栄もなければけれんもなく、まことに素朴なしかも真摯な仕事の上での集まり」であったという。昭和三年五月、東京朝日新聞社ギャラリーで第一回展を開催し、以後ほぼ毎年展覧会を開催、深瀬嘉臣の退会、鴨幸太郎の入会などがあり、昭和十五年二月に解散した。

无型と工人社創立の頃について鴨政雄氏（昭和五年金工科彫金部卒）は編者に凡そ次のように語った。（平成六年四月）

无型と日本工芸美術会が結成されたことにより、工芸は良くなった。高村豊周先生のような方がいなかったら工芸家はいつまでもつまらない職人のままだったろう。私が学校に入った頃（大正十四年）はパリ万国装飾美術工芸博覧会が開催され、津田信夫先生がそれを視察して帰国し、工芸の機運が高まった時代、モダニズムの運動のその時だった。工芸が美術になったちょうどその時代だった。

北原千鹿、高村先生らの金工の研究会ができて、それが中心となって无型を結成したことは知っていた。北原千鹿が東京府立工芸の教師をしていて、その教え子に信田洋がいた。信田が美術学校に入学して、この信田から私と山脇洋二は工人社を作ろうと、誘われたのだった。それは无型の刺激によるというか、ヨーロッパ工芸の影響とかいろいろなことがあって工芸家が装飾美術家として目覚めた時代だから、それでぼくらも目覚めたわけだ。偶然、時代がそうなった。工人社を作ろうというきっかけは時代だ。みんなでやろう、われわれ若い者の時代が来たと思った。工芸美術というのは、全部古いものばかりだったので、もうそのままでいても仕方がなかったから。

当時は帝展に第四部ができて工芸が入り、装飾美術としての工

芸が日本に始まろうとするところだった。しかし、第四部が実際にできてなくても、学生がそういう時代に頭が進んでいたから、工人社はできていただろう。彫金の新しい作品ができたのは工人社が初めだ。それ以外は卒業制作といえども先生に教わって、お寺に行って写生したり、昔ながらのことをして仏像を彫るような者ばかりだった。

卒業制作の図案を私は先生に見せなかった。先生は全然タッチしない。材料費を五十円貰って、先生に関係なく作ればいい。私の卒業制作が出来上がっても、清水南山先生には作品がわからない。でも悪くは言わなかった。生徒も各々自分の制作で精一杯で、いい悪いは言わない。その点のんびりしていた。清水先生とは関係なく自分たちは工人社を作った。僕らが始めたようなことは清水先生はわからない。しかし、先生はたいてい認めてくださった。その点は寛大だった。

北原千鹿は新しい人だった。僕は付き合いが浅かった。信田や村越道守は北原の東京府立工芸学校の教え子で、東京高等工芸学校でも勉強したが、工人社は高等工芸の集まりではなく、美術学校で始まったものだ。工人社は无型の弟分のような印象があるが、无型は教授連中、工人社は学生たち、別々の独立したものだ。私は无型展には新しいものを作って出品した。それまでにも大きな額、レリーフはあったが、私の入選作品「飛行船」は初めての平面の彫金の作品だった。

海野清先生は伝統的な方だから、その仲間と何か伝統的な工芸の会を作っていて、弟子の三井義夫、磯崎美亜はそれに入った。そういう方たちは新しい工芸のこととは関係なくて、無関心だったが、こちらもことさらに反目するような頭や考えはなく、好きだから、自分でやっていただけのことだった。海野先生は仕事がうまく弟子の多い人だった。清水先生は朝八時に生徒より一時間早く学校に来て、生徒の作品を彫って直していた。海野先生の方は絶対に生徒のものを横から彫ったりしないで見ているだけだった。海野先生は江戸っ子のスポーツマンで清水先生とは性格が全然違っていた。

勉強は丸善に来た洋書が美術学校にあったので、それを読んだ。フランスから来た『アートデコレーション』、『美術新潮』のような毎月出ている本をよく見た。読めば勉強になった。フランスからじかに勉強してヒントを得、自分たちもこれをやろうと思った。学校では技術を覚えてしまうために一通り習う。それが終ればあとは制作で、課題はなくて勝手に作ればいい、自由だった。工人社のほかにも展覧会を我々はよくやった。上野の池の端の店で香取正彦さんたちと一緒に展覧会をやったり、丸善でもやったりした。

今思うと美校生時代はのんびりしていた。どこへ勤めよう、サラリーマンになろう、月給をもらおうなどとは思っていなかった。卒業制作の展覧会に在校生の作品も並べてそれが売れ、売れることが珍しい時代だったから、びっくりしたものだ。美校は制作する、新しいものを作ることが目的の学校だった。